

ここに挙げた文章は、おもに私の学生時代にうかがった松村先生の言葉の数々である（ちなみに私が大学で松村先生のレッスンを受けた時期は1985年からの6年間）。そのつど書き留めておいたものなので、実際におっしゃられた言葉に近いものであると思うが、私の捉え方が一面的であったり、先生の真意とは異なる場合もあるかもしれないことをあらかじめお断りしておきたい。これらは、レッスンの際の教えであったり、大学からの帰り道、あるいは演奏会、酒宴の席などで何気なく発せられた一言であったりするが、どれも私にとってかけがえのない金言であり、人生訓であり、今もなお私の中に生き続けている。なお、それぞれの言葉がどのような場面で語られたものか、あるいはその言葉を私なりにどう受け止めたかを、あらためて思い返しながらかけ加えさせていただいた。

・「**“真の音楽”とは、今までになかった（全く新しい）“音楽”であり、なおかつ今までにあった（そしてなおも厳然とあり続ける）“音楽”である。**」 [レッスンにて]

・「**作曲は、単に個人的なものではなく、文化を意識しその一部として花開かせるもの。**」 [レッスンにて]  
新しいものを追い求めるだけでは真の音楽たりえない。過去から現代へと大きく横たわる文化を意識し、自らもその文化の担い手であると強く認識しつつ、現代に生きる自分自身のリアリティのある言葉でもってなされた抜き差しならぬ自己表現こそが、真の作品として結実しうる、ということではないかと私なりに捉えている。

・「**名曲と呼ばれるものにはすべて作家の強烈な個性がある。ベートーヴェンの作品にはベートーヴェンの、ショパンの作品にはショパンの顔があり、それらの個性こそが人々に愛され続けている。**」 [レッスンにて]

作品と聴き手との間に何らかの幸福な作用が生じその結果として名曲が生まれる——見事な表現だと思った。感銘を受けたと同時に、良い作品を残すということは、途方もなく遠いもののようにも感じた。愛されうる作品とは、人一倍音楽を愛した結果生まれるものなのではないかとも考えた。

・「**作曲家は、子供のような純粋な目と科学者のような分析的な目を同時に持ち合わせていなければならない。**」 [レッスンにて]

作曲とは、例えば砂場で好き勝手に遊ぶ子供と、距離を置き干渉せずしかし危険のないよう見守る親と、そんな二者を併せ持つバランス感覚で臨むべきものなのではないか、と私なりに置き換えて考えた。

・「**スコアを丹念に穴のあくほど読み込んでいくことによって、作曲家がその曲を創り上げていった過程を追体験することができる。**」 [レッスンにて]

・「**絵画にとっては、ある作品の色彩や画法がどのように行われたのかを知ることは困難であるが、こと音楽においては、幸いにも、スコアが存在することによってその曲の手の内を容易に知ることができる——レンブラントが色をどのように重ねることによってあのような色彩を出せたのかは定かに知るすべはなく、せめて何度も美術館に足を運んで実物を注意深く観察するくらいのことしかできない。しかし、ストラヴィンスキーが音をどのように重ねることによってあのような響きを作り得たのかを、ありがたいことに、我々はスコアによっていとも容易にしかも正確に知ることができる。**」 [レッスンにて]

松村先生の「楽曲分析」の講義は、強烈なインパクトのある授業であった。「春の祭典」1曲を丸々1年かけて分析していくもので、結局曲の最後までも到達できなかった。私は学部1年のときに受講したが、スコアを読むとはこういうことなのかと、それまでの分析の仕方がいかに薄っぺらいものだったかを思い知らされた。

・「**音楽が拙いがオーケストレーションが巧い、などありえない。**」 [レッスンにて]

ある演奏会の作品について、学生が述べた「オーケストレーションは巧いと思った」との意見に対し、先生はかなり強い口調で反論されていた。オーケストレーションとは音楽の実体に有効に機能して初めて成り立つもので、その巧拙だけを取り出して論じることなどそもそも意味がない、ということかと受け止めた。

- ・「いかなる物事も、前頭葉で捉え、考え、前頭葉から発せられるべきものである（＝阿呆の境地）。」  
[レッスンにて]  
“阿呆の境地”と言われた際の先生の目をむいたような表情がとても印象的だった。
- ・「子供が、宝石よりも飴玉を好むようなもの。」 [レッスンにて]  
ポピュラー音楽について。
- ・「自らの楽想にあまりに長きにわたり囚われすぎると、自家中毒に陥り、かえってよくない。」 [レッスンにて]  
ご自身が作曲に難航していた時だったようで、まさにその時の実感のこもった一言のように思えた、と記憶している。私は作曲の際、この言葉を毎回のように思い出す。
- ・「一流の人間は、無名のときからすでに一流である。」 [先生のお宅にて]  
ご自身のことを言っておられたと思うが、そのような自負を持つとのニュアンスでもあったと思う。
- ・「同じタオル（生地）からとった布切れでも、布巾用に縫われれば布巾として、雑巾用に縫われれば雑巾として、用途を区別されてしまう。」 [先生のお宅にて]  
テーブルの近くにあった雑巾（タオルを雑巾として縫ったもの）を見て。コンサートマスターを例に挙げられていた。かりに同じ力量でも、社会や組織に受け入れられる際に下層からと上層からでは扱われ方が違って来る、という意味であったと思う。
- ・「物の価値観は、普遍的な正道の軸を中心にその時代により振り子のように揺れ動く。世の中の動勢や単なる流行に惑わされることなく、常に本道を見極める眼力がないと、一時的な価値観に振り回される、時世の“太鼓持ち”になってしまう。（自分は常に同じ場所にいるにもかかわらず、振り子が振れたときは見向きもされず、やがて戻ってきたときには理解され祝福される。）」 [学外にて]  
先生ご自身の作曲家としての姿勢、ありようが、端的にまた客観的に語られたものと思う。
- ・「＜交響曲＞が演奏されたとき、併せて演奏されたドヴォルザークの＜新世界＞を聴いて『なんでもたまたした曲だろう、この程度の曲が残るのであれば、自分の曲も当然残るはずだ』と思ったが、アンコール曲のバッハの＜アリア＞を聴いて、『なんと美しい音楽であろう、これこそがまさに真の音楽だ』と、あらためて音楽とは何かを考えさせられた。」 [学外にて]  
＜交響曲＞の演奏後の休憩時間に、伊福部先生から「（否定的に）名曲かそうでないかは初めの30秒を聴けばわかる…」と言われたあとの、後半のプログラムを聴いて思われたこと、だったと記憶している。
- ・「あの美しいテーマに出会って、凡人ならそれをそのまま大事に受け継いでしまっただろう。だがモーツァルトは、大胆にも全く違うあんな激しい楽想をもってくるとは、天才のなせる業だ。」（モーツァルトの交響曲第40番第1楽章の冒頭（16小節目～の箇所）について） [レッスンにて]  
同様に、ベートーヴェンの＜ワルトシュタイン＞の第2楽章（最初のモチーフを3回繰り返す箇所）についても大いに感心されていた。
- ・「“ド-ミ-ソ”であれだけの音楽を作り上げるなんて、まさに天才だ。」（J.シュトラウスIIの＜美しく青きドナウ＞の第1ワルツ冒頭について） [学外にて]  
松村先生の口からJ.シュトラウスが出てくるとはとても意外だった。
- ・「（打楽器に頼った部分について）音楽の実体を担っていない。」 [レッスンにて]  
現代日本のオーケストラ演奏会（日本交響楽振興財団）における某作品についての言葉。
- ・「埼玉でフランス語かー。」 [学内にて]  
私の大学1年次の提出作品の演奏審査終了後、拙作のタイトルを見ての一言。（以後私はフランス語でのタイトルは付けていない。）

- ・「作品には“個性”といえるものと、個性とまではいえない“キャラクター”というものがあるように思える。」 [学内にて]

芸大モーニングコンサートでの塚本一実作品を聴いて。まだ未熟な点があるものの、作品の中に魅力的な要素を感じ取られての一言と受け止めた。

- ・「作品は点では存在しない。線になってようやく作家の作品となる。」 [先生のお宅にて]

作品とは、作家の歩む軌跡の中でそのたびごとに生み落とされていくもの。そのつどの帰結ではあっても完結ではないはず。作品どうし何らかの連続性があるべきで、聴き手はそこに作家の何ものかを感じ取ろうとするのではないか。そもそも作家たるもの、作品一つ書き上げて満足できるものではないはずだろう——そのような意味と受け取った。当時先生目から、1作ごとに立ち止まっているように見える私の姿を戒める意味がこめられていたようにも思う。

- ・「桜は桜として、梅は梅としてそれぞれの花を咲かせればよい。桜は梅がどんな花を咲かせようが知る由もない。」 [学外にて]

どこか突き放すような口調であったように記憶しているが、有り難い叱咤激励であった。

- ・「作曲とは、知的な操作や逆に奔放な衝動的な感覚に頼るのではなく、極度に透明な高度の感性によって把握されるべきもの。」 [NYでの講演の草稿より]

語られたものと違い、推敲を経たものだけに、凝縮された重みのある言葉である半面、普段語られる言葉とやや隔たりを感じる（先生の言わんとした本当のところを私はまだ理解できていない気がする）。

以下は松村先生から語られた先生以外の方の言葉（一節）であるが、引用された言葉であっても先生のそのときどきの考え方が強く反映された興味深いものであったので、ここに挙げたい。

- ・「散弾銃をバラバラ撃つより、大砲を一発撃て。」 [引用（伊福部昭・談）]

これは伊福部先生の半ば口癖のような言葉だったようで、松村先生のレッスンにおいて「伊福部先生が…」と前置きしながら何度となくおっしゃった言葉。もはや松村先生ご自身の言葉としての強い説得力を持つものとして、私にとってとくに印象に残っている（私はときに遅筆の言い訳として使ってしまったもいる）。

- ・「神を信じるのと神を知るのとは、山に登ると山の麓をうろろすることほどの違いがある。」 [引用（井上洋治神父・談）]

- ・「“宗教”という実に深遠な概念を持つことのできるわれわれ“人類”とは、なんと素晴らしい存在であろうか。」 [引用（不明）]

先生は「沈黙」作曲の最後の時期、終わりの部分について激しい自問自答を繰り返しておられたように見受けられた。宗教についてのこのような示唆に触れては、その本質に肉薄しようとされたのではないだろうか。

- ・「作ることに心急いで歴史感の確立がなければ、その作者（作家）の『いま』の位相が見定められないはずで、『自分自身』の『俳句史（作品史）』を持たない俳人（作曲家）はまた『私』の『俳論（音楽論）』がないということである。俳句（作曲）のアマとプロは、あるいはここで分けられるのかもしれない。」

[引用（上田五千石・著『俳句』より）]

先生は「今後書くであろう作品が、いくつもの卵が数珠のように連なって見える。それは若い頃から、そして今現在もそうだ。」とおっしゃっていた。作家としての歩みの道筋を漠然と意識しながら、その時その時の作品に取り組んでおられたのだと思う。

- ・「良くも悪くも、私は書き切った。」 [引用（堀田善衛）]

作品を書き上げるということはどういうことか。終止線を引いたとき“書き切った”といえるものであったか。曲を書き終えたあと、この言葉を半ば恐る恐る自問自答する。

・「“生”きると“死”ぬとを重ねてみると“花”という字に見えてくる。」【引用（水上勉・談）】

先生が水上勉さんと会われた際に聞いたという、漢字の「生」と「死」を重ねて書くと「花」の字に見えるというもので、先生はえらく感心された様子で話していらした。先生はつねに、一見他愛ない遊び心の中にも物事の本質が潜んでいるのではと、という自由で豊かな眼差しと、またそれを楽しまれる無垢で大らかな心をお持ちであった。

先生は、自ら発した言葉が固定化されることを嫌われたようで、その場のやりとりや話の脈絡から発せられた言葉を文章として残すことは、先生の意に反することかもしれない。今回これを公にすることに多少ためらいもあったが、あくまでも私個人の松村先生の思い出話と受け止めていただければと思う。

私にとって、松村先生と接するひとときは、実に濃密で深遠な何にも代え難い珠玉のような時間であった。レッスンでは拙作を見ていただく時間だけでなく、他の学生のレッスンでのやりとりでさえ大変勉強になり、ときに先生の一言で感動し目が潤むことさえしばしばであった。そういったことから、いつしか先生の言葉を私的に書き残しておきたいと思うようになった。松村先生はよく「伊福部先生は…」と師の言葉を引き合いに出されることが多かったように思う。私もこれまで、先生の言葉やエピソードを学生に話してきた。松村先生の薫陶を受けた者として、それを次世代に語り継いでいくことは、私の大きな使命の一つであると強く思っている。